

スポーツコンプレックス推進事業（まちづくり連携支援事業）

いわきスポーツコンプレックス β
～ 地域共創型まちづくり実証プロジェクト ～

2026年（令和8年）3月

株式会社いわきスポーツクラブ

1. 事業のビジョン等

(1) 事業の背景

- ✓ 東日本大震災から15年が経過するいわき市において、株式会社いわきスポーツクラブは2015年12月の設立以来、地域住民・企業・教育機関等との多様な連携を通じて人流と交流を生み出し、地域コミュニティのハブとして機能し続けてきた。
- ✓ 2025年には新スタジアム構想「IWAKI STADIUM LABO構想」がいわきスポーツクラブより発表された。本事業はこの構想を受け、スポーツ施設単体の整備にとどまらず、観光・商業・交通・温泉等の既存都市機能と有機的に接続する「スポーツコンプレックス」としての実現可能性を検証することを目的として実施したものである。

(2) 目的・ありたい姿・構想

- ✓ 本事業においては、スポーツを核とした都市機能の再編に向けた将来像の検討を目的として、地域関係者を対象としたワークショップを実施し、地域における現状課題及びそれらに対する解決の方向性についての抽出を行った。
- ✓ 主な課題は、以下の4類型に大別され、これらはそれぞれ、地域内における来訪・移動の困難性、スポーツへの接触機会の不足、若年層の流出、地域資源間の分断といった地域構造上の課題として整理された。
 - ✓ 「交通・導線・距離に関する課題」
 - ✓ 「スポーツ・エンターテインメント機会に関する課題」
 - ✓ 「人材流出及び教育に関する課題」
 - ✓ 「地域間連携に関する課題」
- ✓ これらの課題に対しては、移動の動線形成、スポーツとの接点の創出、学びの機会の組込み、賑わいの創出、公共性の付加といった観点から、都市機能を横断した複合的な取組のアイデアを検討した。具体的には、試合日やイベント日に合わせた周遊導線の設計、競技体験拠点の分散配置による回遊型イベントの形成、学校・地域・スポーツ施設を接続する育成導線の可視化、防災・福祉機能とイベント動線の両立といった取組が検討された。
- ✓ これらの課題及び取組の方向性を踏まえ、スポーツ施設を中心に地域内の観光資源、教育機関、商業施設、公共交通等を有機的に接続する都市構造のあり方を概念スケッチとして空間的に表現した。（次項：いわきスポーツコンプレックス構想（β版）～スポーツを起点にしたまち全体の回遊モデル～）

1. 事業のビジョン等

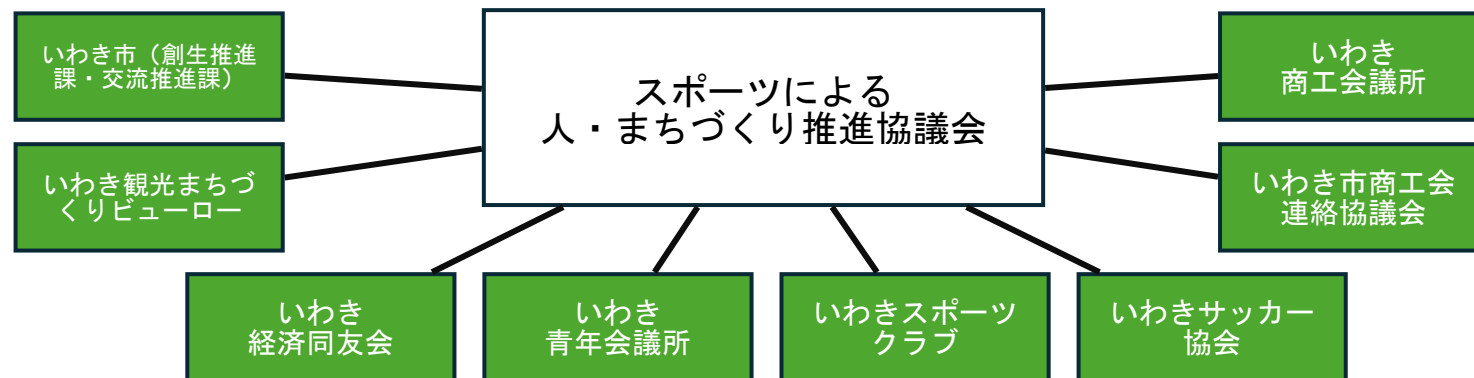
(2) 目的・ありたい姿・構想



- ✓ 本スケッチは、1日の時間の流れ（朝→昼→タ→夜）を円環状に配置した構図により、スポーツ観戦を起点とした「まちの1日」を描いている。円の起終点には新スタジアムが位置し、そこから地域の各資源へとつながる回遊動線が表現されている。
- ✓ 具体的には、地域とスポーツが連携して育てる次世代の人材（2）、スタジアムと温泉・観光拠点をつなぐ回遊シャトルバスの実証（3：本事業の実証に該当）、スポーツ観戦を起点に人・地域・都市がつながる交流拠点（4）、地域の食や自然と出会う観戦日の楽しみ（11）、宿泊施設や飲食店舗と連携した回遊施策（12）といった要素が、時間軸に沿って有機的に配置されている。
- ✓ すなわち、当該スケッチは、スタジアム単体の整備を前提とした拠点形成ではなく、周辺地域に点在する既存資源を結節点として再編し、日常的な移動・学習・交流の導線をスポーツを介して接続することにより、イベント時のみならず平時においても機能する持続的な地域拠点の形成可能性を示唆するものである。

1. 事業のビジョン等

(3) 関連するステークホルダー



(4) 官民連携協議会

協議会名称	スポーツによる人・まちづくり推進協議会
協議会の目的・目標	いわきスポーツクラブの理念に共感し、地域と連携してスポーツが持つ力を最大限に活用した「人・まちづくり」を推進することにより、東北一「夢・感動・未来に溢れる都市」いわき”の実現に寄与することを目的として、2017年に設立。活動軸は「市民の健康増進」「未来を拓く人財の育成」「シティセールス・都市ブランド力向上」「いわきFCの応援」の4つ。
日時	検討事項
2025年12月17日	スポーツコンプレックス推進事業の推進内容の協議
2026年1月19日	地域課題及び解決策の洗い出し（ワークショップ）
2026年1月27日	課題の類型化及び実証の方向性の検討（ワークショップ）
2026年2月25日	実証内容の最終確認及び構想スケッチのラフ案確定（ワークショップ含む）
2026年3月7日	回遊型シャトルバスの実証実施（いわきFCホームゲーム）

2. スポーツコンプレックスの実現・発展に資する取組等

(1) 実証

- ✓ いわきFCのホームゲーム前後の時間は、本来、地域内の観光資源や商業施設等を楽しむ機会となり得る一方で、現状においては拠点間の移動手段が十分に確保されていないことにより、来訪者の回遊行動が限定されている可能性があることが課題として認識。
- ✓ 加えて、ハワイアンズスタジアムいわきは、公共交通機関からのアクセスが良好とは言えず、かつスタジアム周辺の駐車台数も限定的であることから、試合開始の5～6時間前にわざわざ駐車場を先行確保する目的で来場するファンが一定数存在する。こうしたファンは、駐車後に試合開始までの時間を多分に持て余しているものの、スタジアム周辺に公共交通機関が存在しないことにより、スタジアムの外に出て街を回遊する手段がない状態にあった。
- ✓ スポーツイベント開催日における来訪者の地域内回遊の促進可能性を検証するため、スタジアムと周辺観光資源等を接続する回遊型シャトルバス「IWAKI FC 周湯～バス」の運行を実施した。
- ✓ 具体的には、ホームゲーム開催日である2026年3月7日において、スタジアムと市内の観光施設、商業施設等を結ぶ乗降自由のホップオン・ホップオフ型の回遊型シャトルバスを運行し、スポーツ観戦を契機とした地域内移動の利便性向上及び回遊行動の創出に関する検証を行った。



実証イベント当日の様子①
(朝一番でハワスタに駐車後、9時発の第1便に乗車するグループ)
© 2026 IWAKI SPORTS CLUB CO., LTD.



実証イベント当日の様子②
(道の駅いわき・ら・ら・ミュウにて両チームのサポーターが交流)
© 2026 IWAKI SPORTS CLUB CO., LTD.

2. スポーツコンプレックスの実現・発展に資する取組等

(2) 効果検証

- ✓ （仮説1）回遊型シャトルバスは、普段は街に出ない地元ファンを街に送り出す
 - ✓ 地元ファン（n=53）の回遊率（スタジアム以外の施設を訪問した割合）が、普段26.4% → 実証日83.0%（+56.6pt）へ増加。普段は街に出ない地元ファンを観光・飲食・温泉施設へ送り出す効果が確認された。
- ✓ （仮説2）回遊型シャトルバスがなければ、回遊先には行かなかった（反実仮想）
 - ✓ 回答者（n=94）の66.0%が「バスがなければ行かなかった」と回答。単なる移動の利便向上にとどまらず、新たな回遊行動そのものを創出する効果が示された。
- ✓ （仮説3）回遊型シャトルバスは、普段は発生しない消費を街にもたらす
 - ✓ 普段は地域で消費しない層（非回遊者、n=53）の消費が、回答者全体の推計消費額のうち54.8%を占めた。従来は発生しなかった消費を地域にもたらす効果が確認された。
- ✓ （仮説4）回遊型シャトルバスにより、来場者が街で過ごす時間が長くなる
 - ✓ スタジアム外での平均滞在時間が普段の68.0分 → 実証日98.6分（+45.1%）に延長。地域内での長時間滞在の促進効果が示された。
- ✓ （仮説5）回遊型シャトルバスの利用満足度は高く、継続利用意向がある
 - ✓ 満足度90.4%・継続利用意向87.2%（n=94）。利用者から高い評価が得られた。

2. スポーツコンプレックスの実現・発展に資する取組等

(2) 効果検証

- ✓ アンケートの自由記述欄には、94件中90件（95.7%）の有意な回答が寄せられた
 - ✓ このうち記述内容をテーマ別に分類できた55件について、以下の傾向が確認された。
 - ✓ なお、1件の回答が複数テーマに該当する場合があるため、下表の件数合計は55件を上回る。
 - ✓ （観光を楽しめた：24件）「道の駅やほるるなど、普段行かない場所を巡れて楽しかった」
 - ✓ （駐車場制約の解消：17件）「一度駐車場に車を止めると移動できないので、バスは助かった」
 - ✓ （アウェイサポーターとの交流：8件）「アウェイサポーターと一緒に乗れ、いい関係が作れた」
 - ✓ （継続運行の要望：12件）「毎回運行してほしい」「新スタジアムでもぜひ」
 - ✓ （便数の増加要望：6件）「もう少し便数が増えるとより活用しやすい」
 - ✓ （停留所・ルート拡充：5件）「停車場所のラインナップを増やしてほしい」
 - ✓ （乗降場所の案内改善：7件）「バス停の場所がわかりにくかった」
- ✓ また、自由記述には交流体験に関する記述も複数見られた。
 - ✓ 「アウェイサポーターと一緒に乗れ、いい関係が作れた」
（いわき市在住／いわきFCサポーター／50代 男性／普段の試合は自宅とスタジアムの往復が習慣／実証日は湯本温泉街のバス停を利用）
 - ✓ 「いわきサポーターやスタッフの方々に色々と親切に教えていただき、助かりました」
（県外在住／RB大宮アルディージャサポーター／50代 女性／道の駅や湯本温泉街のバス停を利用）
 - ✓ 「いわきの人みんな優しかった」
（県外在住／RB大宮アルディージャサポーター／10代 女性／ハワスタ観戦は初めて）
- ✓ こうした声は、回遊型シャトルバスが単なる移動手段にとどまらず、ホームとアウェイのサポーターが同じ空間を共有するという、スポーツを介した地域間交流の場として機能した可能性を示唆している。規模拡大や継続運行を通じて、この「交流の場としての機能」をさらに育てていくことが、スポーツコンプレックスの価値向上につながると考えられる。

3. 今後の展望

(1) 将来的なビジョン

- ✓ 本事業を通じて、スポーツ観戦を契機とした地域回遊モデルの成立可能性が確認され、スポーツを起点とした都市機能連携の具体的な検討を進める基礎的知見を得ることができた。今後は、当該ワークショップにおいて整理された課題類型及び、スケッチにより可視化されたスポーツコンプレックスの構成要素を基準としつつ、交通・モビリティ施策を基軸とした回遊環境の整備を段階的に進めるとともに、観光、教育、商業等の他分野との連携を含めた都市機能の統合に向けた取組を中長期的に検討していくことを想定している。
- ✓ すなわち、本事業における実証的取組は、スポーツコンプレックスの形成に向けた初期段階の取組として位置付けられるものであり、交通施策を起点として、将来的には他の課題領域に対応する施策へと展開していくことにより、地域全体としての持続的な都市拠点の形成を目指すものである。

(2) 中長期的な構想または具体的な行動計画

- ✓ 交通・モビリティ施策の継続・拡充
 - ✓ 回遊型シャトルバスについては、来年度以降もホームゲーム開催日における実証運行を継続する方針である。短期的には無料運行を維持しつつ運行回数を段階的に拡大し、中長期的には有料化による持続可能な事業スキームの構築を目指す。
- ✓ 他競技との連携
 - ✓ いわき市内で活動する他競技チームや団体との連携により、複数競技のイベントを組み合わせた複合的なスポーツ体験（同日・連続開催や合同イベント等）を推進し、スポーツコンプレックスの対象をサッカーに限定せず、複合的なスポーツを通じた地域活性化モデルの構築を目指す。
- ✓ 協議会との連携深化
 - ✓ 協議会の構成員である行政機関、経済団体、観光団体等との協働により、回遊型シャトルバスの継続運行だけでなく、地域内の観光資源を活用した連携イベントの企画・実施や、新スタジアム構想への具体的な提案等、より実践的な活動を展開していくことを目指す。
- ✓ IWAKI STADIUM LABO構想への反映
 - ✓ 本実証で得られたデータ及び知見を反映し、シャトルバスの乗降拠点の配置や試合前後の観光情報提供機能の導入等、交通及び情報提供に関するソフト面の取組を設計に組み込むことを検討する。

3. 今後の展望

(2) 中長期的な構想または具体的な行動計画

具体的な行動計画	現状値 (実証実績)	短期（令和8年度）	中期（令和9-10年度）	長期（新スタジアム）
シャトルバス運行回数	1回（実証）	2試合以上	5試合以上	全ホームゲーム
運行携帯	無料（実証）	無料継続	無料（有料化検討）	有料化の実現
バス利用率（延べ）	10%	10%以上	15%以上	20%以上
連携拠点数	5か所（バス停数）	7か所以上	7か所以上維持	10組織以上
利用者満足度	90.4%	80%以上維持	80%以上維持	85%以上
利用意向	87.20%	80%以上維持	80%以上維持	85%以上

- ・短期（令和8年度）：シャトルバス継続運行（2試合以上・無料）、協議会との連携継続、他競技連携の協議開始
- ・中期（令和9～10年度）：運行拡大（5試合以上）、複合スポーツイベント企画、有料化の検討
- ・長期（新スタジアム整備段階）：全試合での定常運行・有料化の実現、複合的なスポーツコンプレックスの形成